

# 香大生プラス「さぬき」のソーシャル・ ワーカー等プラス宮脇町住民によるボラン ティア共同研究

代表者 花 田 理 紗 (法学部法学科3年)

## 1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、養護老人ホームでのボランティア活動を通して、今まで各人が身につけた社会福祉に関する知識の理解を深めるとともに、学生と地域の人々との繋がりも増やして行こうというものです。

## 2. 実施期間（実施日）

平成23年4月16日 から 平成23年12月7日まで

## 3. 成果の内容及びその分析・評価等

このプロジェクト事業は、高松市宮脇町にある「養護老人ホームさぬき」に毎週水曜日に訪問し、ボランティア活動を行うことです。具体的な内容は、施設利用者の方とコミュニケーションをとることや、施設内の掃除、売店の売り子などを行いました。私たちは養護老人ホームに足を運ぶこと自体初めての経験だったので、ボランティア活動を始めた頃はいつも緊張していました。利用者の方とどのように会話すれば良いのか分からず、ただ立っているだけの時間もありました。しかし、回数が増えていくにつれて、私たちも、利用者の方たちも慣れてきたのか、どうにか会話できるようになっていきました。時には「次はいつ来るの」と言ってくれる方もいて、このボランティア活動が利用者の方にとって少しでも心に残る出来事となっていることが実感できました。

また、施設で季節ごとのレクリエーションが行われる2～3週間前から、利用者の方と一緒にその準備のお手伝いをしたり、テーブルの上でできるミニボーリングを一緒にしたり、紙芝居を見たりと、様々な遊びを利用者の方としました。

8月には、施設の大イベントである夏祭りにも参加させていただきました。この夏祭りは利用者の方の家族はもちろん、ボランティアとして宮脇保育所の園児たち、宮脇町住民の方も参加しており、地域一体となって盛り上げるイベントとなりました。利用者の方と一緒に盆踊りをしたり、おみこしを担いだり、かき氷早食い対決に参加したりと

地域の住民の方との相互交流を図れました。このイベントは施設と地域と香大生との結びつきにつながったと思います。

#### 4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

養護老人ホームという一つの施設では、つい生活の流れが閉鎖的になりがちです。介護は一人でやるよりも大勢でやる方が、一人ひとりの負担も小さく済むし、更に地域ぐるみで行うと交流の場も増え、それがきっかけとなり地域がまとまり始めます。私たちも地域社会に貢献したいと思い、施設の方と宮脇町住民の方に混じってボランティア活動を行いました。まだまだ小規模なため、認知度は低く、できることも限られています。しかし、このような地道な活動を続けていけば、新たに交流の場が広がり、何かしらの良い影響が地域に出てくるのではないかと考えます。少なくとも施設利用者の方にとっては若い世代との交流が刺激になり、より充実した生活を送ることができるのではないかと思います。

#### 5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

今回ボランティア活動に参加して、たくさんのことを学ぶことができました。まず、コミュニケーションは簡単にとれないが、相手の気持ちを理解したい、という気持ちを持つことの大切さです。お年寄りの方は体の機能が低下しており、うまく話すことができない人もいます。でも何を言っているか分からないからといって、一生懸命口を動かして出てきた言葉を受け取ろうとしなかったら、その人はどうなるでしょうか。誰にも聞いてもらえないと思い、喋ろうとしなくなり、ますます話す能力が低下してしまいます。意志表示は大事な行為です。お年寄りの方が、できることが少なかったり、遅かったりしても一人の人間です。そして私たちの人生における大先輩なのです。敬意を持って、コミュニケーションすることが必要になります。また、出来ないことがあっても、少し手を貸せば成し遂げられる、ということです。七夕の飾りつけを折り紙で作ることになり、利用者の方に折り紙を教える、というボランティア内容の日がありました。そのとき、私たちにとっては簡単な折る作業、ハサミで切る作業、のりで貼る作業がお年寄りの方にとっては難しい作業であるということに気づきました。だからといってその作業をやめさせるのではなく、少し手伝ってあげ、アドバイスをするとどうにか完成させることができます。折り紙を完成させたときの表情はとても嬉しそうで、そのあとはもう一人で同じものを作り始めます。自分でもできた、という自信が行動につながるのだと感じました。だから、お年寄りには難しいから無理だ、と私たちが諦めては何にもなりません。できない箇所をカバーすれば、お年寄りの方にできることはたくさんあるのです。

このようなことを学べたおかげで、日常生活で出会うお年寄りの方の見方が少し変わりました。また、いかに自分が同年代だけと付き合ってきたかが分かり、情けない思いをしました。幅広い年代の人と実際にコミュニケーションをとることによって、会話が豊かになり、自分を成長させることになると感じました。これから就職する身としてその点に気をつけようと思う良い機会になりました。



## 6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

反省点は、少し受身の態勢でボランティア活動を行ってしまった点です。もっとメンバー同士で意見を出し合い、計画し、実践していくべきでした。確かにこのボランティア活動で学んだことはたくさんあります。しかし学生自らが主体となつての活動はあまり実践することができませんでした。

今後は、この反省を生かして何事も自分で考え行動することと学部外への当プロジェクトの周知を心掛けていきたいです。学部内での認知度は高まってきましたが、学校全体となるとまだまだ知られていないのが現状です。このプロジェクトは法学部だけでなく他学部の学生が参加することにも大変意義があると思います。ポスターの製作など、よりたくさんの人にプロジェクトを知ってもらうような措置をとるべきでした。

最後になりましたが、このようなボランティア活動に一年間参加して、普段の生活では体験できないようなことをさせてもらい、たくさんのことを学ぶことができました。ご支援していただき、ありがとうございました。

## 7. 実施メンバー

代表者 花田 理紗（法学部3年）

構成員 泉谷 綾乃（法学部3年）

弘光 真紀（法学部3年）

細川 育美（法学部3年）

加藤 晃平（法学部1年）

宮本 将和（法学部1年）

下元 香菜（法学部3年）

藤山 祐美（法学部3年）

竹内 駿矢（法学部1年）

山崎 真（法学部1年）

王 冬嬌（法学部1年）